# 19世紀アメリカのブラックフェイス・ミンストレル

## ―ナショナル・ヒストリーから大西洋史へ―

森　脇　由美子

**要旨：**19世紀にアメリカで大流行した大衆芸能ブラックフェイス・ミンストレルは、音楽、ダンス、寸劇の要素が合わさっていることから、文学、音楽やダンス研究、歴史学と多方面から研究が行われている。ブラックフェイス・ミンストレルに見られる黒人文化の借用や差別的内容、その影響力などは多くの研究者の関心を集めてきた。とりわけ1990年代以降は、ホワイトネスの研究者たちが移民労働者たちの「白人性」の構築過程を探るための手掛かりとしてこれを取り上げたため、その人種意識が国民化や国民文化などと結びつけて論じられることが多かった。しかし近年では、このようなナショナル・ヒストリーを超え、大西洋史的視座から捉える研究も見られるようになった。これまでの研究を振り返るとともに最新の研究を紹介し、ブラックフェイス・ミンストレル研究の今後の方向性を展望する。

### はじめに

現在、ブラックフェイス・ミンストレルは、白人による黒人文化の「文化盗用」の典型として社会的に否定されており、当然ながらアメリカで公に演じられることはない。この舞台文化は今日的な視点からは人種差別の権化としか見えないものといえる。しかし、ある社会集団が他の社会集団を「真似る」行為がそこに見られるとすれば、それは文化における接触や混淆についての議論を深めるための有効な分析対象となりうる。

現代のポリティカル・コレクトネスを重視する社会環境では、「人種」や先住民に言及する際には特に文化にみられる権力関係（ポリティクス）が意識され、他者の文化を使用することは悪とされる。とりわけアメリカでは、「他者」の文化を真似る行為は、「文化盗用」としてしばしば激しい糾弾に合う。その一方で、こうした考え方は、さまざまな文化的事象が特定の社会集団に帰属し、社会集団は固有の「純粋で本物」の文化をもつという見方に立つものであり、これまで歴史の中で見られた文化交流や混淆の実態と必ずしも一致するものではない。とはいえ、こうした「文化盗用」という考えは、インターネットが普及する社会において、いっそう影響力を増している現状がある。

しかし、今日では最もグロテスクな「文化盗用」とも見なされるブラックフェイス・ミンストレルを、それを生み出した現実のアメリカ社会においてとらえることは、アメリカ社会における文化交流・混淆の実態や意義、アメリカ文化のなかの人種関係の複雑さや多重性を理解する手掛かりとなる。実はそれこそが、演劇の研究者でもダンスや音楽の研究者でもない、19世紀アメリカの社会史を研究してきた筆者が、ブラックフェイス・ミンストレルに関心を持ったゆえんでもあった。この演芸が現実の歴史の中でどのように形成されたのか、そこでは文化をめぐるどのようなせめぎ合いが見られたのか、これらを歴史的文脈の中で明らかにすること

は、19世紀アメリカの文化におけるポリティクスの重要な部分に光を当てることになると信じるからなのである。

ブラックフェイス・ミンストレルの研究は、アメリカではとりわけ1990年代以降、活発化した。日本においても近年、歴史学のみならず文学や音楽・ダンスなどの文化研究において数々の研究が発表され、研究者の関心を集めるようになっている。2020年にはウェルズ恵子氏の編集による史料集も刊行され、今後も研究が深化していくものと思われる。ただし本稿では、アメリカにおける現在の研究状況を確認することを目的とし、かの地でのこれまでのブラックフェイス・ミンストレルの研究を、主に歴史学の視点を重視しながらその動向を見たうえで最新の研究傾向を紹介し、今後のブラックフェイス・ミンストレルの研究を展望したい。こうした試みはアメリカ社会や文化における文化交流や混淆の意味や、アメリカ文化における「黒い」文化の要素とは何か、といったことを考える手掛かりとなると考える[(1)]。

## 1. ブラックフェイス・ミンストレルへの関心

ブラックフェイス・ミンストレルは19世紀に舞台に登場すると一躍一世を風靡したが、この演芸は「低俗」で差別的な内容の「笑劇」と見なされ、長らく演劇研究の俎上に載せられることはなかった。ブラックフェイス・ミンストレルは音楽・踊り・笑劇の要素がまじりあった19世紀の演芸であり、これを分析するには、自ずと文学研究、音楽研究、歴史学研究と異なる領域からの接近が必要とされる。分析対象となる史料としては台本と楽譜が多く残されているが、即興性が高いこの手の演目を復元することは容易ではない。ブラックフェイス・ミンストレルを最初に学問的に取り上げたのは、おそらくHans Nathanの*Dan Emmett and Early Negro Minstrelsy*（Norman, Okla., 1962）だと思われる。Nathanの研究はDan Emmettをいわゆる「ミンストレル・ショー」の創始者であるとし、Emmettの「ミンストレル・ショー」はすでにアメリカ社会にあった黒人への人種差別をさらに助長したと断じる。Nathanはアメリカのミンストレルにヨーロッパ、なかでもイギリスのミンストレルの影響を認めるが、その違いも強調しており、Emmettのショーではイギリスのものに見られる黒人への肯定的な要素が見られないと述べている。ただ、Nathanの研究が発表されて以降も、しばらくはこの種の芸能への学問的関心はさほど高いとはいえなかった。ブラックフェイス・ミンストレルに関心を持つとすれば、それは主に残された台本を文学的アプローチから研究することだが、当時の文学研究では作品としてのオーセンティシティが重要な意味を持ち、通俗的作品に関心が向けられることは少なかったのである[(2)]。

ところで、ブラックフェイス・ミンストレルを取り上げる場合、どの範囲のものを含めるかということも、それをどのようなものとみるかという立場にも大いに影響している。Nathanの研究ではEmmettが重視されるが、顔を黒塗りにして演ずる出し物自体はそれ以前にもアメリカで演じられ人気を得ていた。T. D. Riceが演じた南部プランテーションの奴隷Jim Crowは、Emmettが黒塗りでバンジョーを弾きながら演技を始めるよりも10年以上前に、すでにアメリカの劇場で喝さいを浴びていた。このJim Crowに加え、George Washington Dixonの演じる都会の「学のある」洒落者の黒人Zip Coonなどミンストレル・ショーの定番となる役柄のいくつかは1830年代半ばにはすでに舞台で人気を得ていたのである。また、ブラックフェイス・ミンストレルはアメリカの劇場でボードビルの人気が高まる19世紀終わり頃まで、根

強く人気を保っていた。南北戦争後には、黒人によるミンストレルの劇団も結成され、白人の演ずるものより自然で「本物」であるという触れ込みで人気を集める劇団も現われた。

Nathan 以外に比較的早い時期に出された研究として注目すべきものに、 Robert Toll の *Blacking Up: The Minstrel Show in the Nineteenth-Century America*（New York, 1974）がある。この研究には Nathan のような、ブラックフェイス・ミンストレルの「黒い」要素やその文化的な意味合いについての明確な主張を読み取ることは難しいが、その一方で、初期のミンストレルから南北戦争後の黒人によるミンストレル（「ブラック・ミンストレル」）までを網羅的に調査している点が際立っている。Toll の記述の中で特に興味を惹いたのは、黒人の演技者に関するもので、南北戦争後にジョージア・ミンストレルは南部のプランテーションの元奴隷による「本物」のミンストレルとして興行をうち、最初、黒人たちは何も塗らず自分の肌色で演じたものの、観客がそれをミンストレルとは思えなかったため、黒人の演技者にも「黒塗り」をさせたという点である。観客たちは定式化したミンストレル・ショーを受け入れていたので、「黒塗り」をしない黒人たちのショーを黒人たちの「本物」の文化として受け止められなかったのである。白人が黒人を真似たとされるものを、さらに黒人が真似る（真似させる）という、何重にも屈折した「黒い」文化を、観客が見て楽しんだことになる。一方、演技・演奏者たち自身は白人が好む黒人像を演じたために葛藤を抱えることになるが、白人の観客を利用して経済的自立のチャンスを得たという面もあった[(3)]。

## 2.「愛と盗み」、そして白人性の構築

これまで紹介した研究は、主に最盛期のミンストレルの研究だったのに対して、形成期のブラックフェイス・ミンストレルに注目した研究が 1990 年代に発表される。Eric Lott の画期的な研究 *Love and theft: Blackface Minstrelsy and the American Working Class*（New York, 1993）は、Emmett が率いたヴァジニア・ミンストレル以前のブラックフェイスの演目により関心を示し、そこに北部白人労働者たちの階級としての意識が表現されていると見る。白人労働者の階級意識に焦点を当てた研究が 1990 年代に出された背景としては、1970 年代から 1980 年代かけて、いわゆる「新労働史」の研究者が、社会史的アプローチを用いて工業化初期の労働者たちの階級意識に切り込む研究を数多く発表していたことがある。そこでは労働運動だけでなく意識面が分析対象となり、そのため日常生活や娯楽などへの関心が高まった。「新労働史」の日常生活や文化的側面への接近は、ブラックフェイス・ミンストレルからアメリカ社会および文化に内在する問題に迫るという Lott の研究スタイルに呼応するものであった[(4)]。

ブラックフェイス・ミンストレルは、1850 年代になると中産階級化していくが、1840 年代までの形成期の最も中心的な観客層は、確かに北部都市の男性の白人労働者階級で、彼らは市場革命の進行によって自立性を失いつつあった。彼らは黒人の文化を「盗み」、その「盗んだ」文化によって彼らの黒人に対する歪んだ感情を表現したという。

Lott によれば、ブラックフェイス・ミンストレルは白人と黒人の文化的交流や混淆から生み出された文化などではなく、北部都市の白人労働者たちによる、白人労働者のための文化なのであった。彼らの黒人を表現する方法は、きわめて侮蔑的であるのだが、こうした表現は白人労働者階級の人々の意識にある二重性を表していた。極度に誇張した乱暴な言葉遣いや黒人の体力や性的能力の強調は、黒人が「動物的」で「野蛮」な存在であることを強調しているが、

ある種の共感もひそかに覚えていたという。「男らしさ」や「乱暴さ」は力を奪われつつあった労働者階級にとって求めるものでもあったのである。また、南部の「のろま」な奴隷が主人をからかう様子を笑う場面では、観客は奴隷の「のろま」さ加減を笑うとともに、翻弄される主人もあざ笑い、上位者に対する不満のはけ口とするという要素もあったという。Lott によれば、ブラックフェイス・ミンストレルは、白人としてのアイデンティティを高める階級融和の場として機能するとともに、それと矛盾するように、白人労働者たちの文化の、その階級的性格を強化するものであったと指摘している[(5)]。

Lott の研究を契機として、1990 年代にはブラックフェイス・ミンストレルへのアカデミックな関心が高まりを見せ、演劇、音楽、ダンス（身体表現）の各方面からの研究が進んだ。その一端はブラックフェイス・ミンストレルの論文集 *Inside the Mask: Readings in the Nineteenth Blackface Minstrelsy* (Middletown, 1996), ed. Annemarie Bean, James, Brooks McNamara によって知ることができる。これまでミンストレル研究を牽引してきた Nathan や Toll、Lott らの論考が並ぶとともに、音楽や身体表現に切り込んだ研究もこの論文集に収められている[(6)]。

Lott の研究はさらに、直接この時代の演劇や音楽の研究に携わっていない研究者たちからも注目されることになる。1990 年代からしばらくの間、ブラックフェイス・ミンストレルは、もっぱら、白人労働者たちの人種意識を炙り出すものとして分析の対象となった。白人労働者たちの人種意識に注目していたホワイトネス研究は、白人意識の構築の過程を表すものとしてブラックフェイス・ミンストレルを取り上げたのである。その最も影響力のあるものは、19 世紀の白人労働者階級を研究した歴史家 David R. Roediger の *The Wage of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class* (New York, 1991)〔邦訳、小原豊志、竹中興慈、井川眞砂、落合恵子訳『アメリカにおける白人意識の構築――労働者階級の形成と人種』（明石書店、2006 年）〕で大いに注目された[(7)]。

これらのホワイトネス研究は、確かに「新労働史」研究に欠けていた視点をえぐり出した。例えば、新労働史研究の秀作、Sean Wilentz の *Chants Democratic: New York City & the Rise of the American Working Class, 1788-1850* (New York, 1984)［邦訳　安武秀岳監訳、鵜月裕典、森脇由美子訳『民衆支配の賛歌――ニューヨーク市とアメリカ労働者階級の形成 1788〜1850』（木鐸社、2001 年）］は、ニューヨークの労働運動や社会運動を通して白人労働者たちの階級形成の過程を丁寧に跡付ける一方、北部で最大の黒人人口をもつ（全米の都市のなかでも黒人人口が二番目に多い）都市を取り上げながら、人種関係についての記述がほとんど見当たらないという難点があったからである。Wilentz の描くニューヨーク市の歴史の中には、職人労働者たちの労働運動が続く中で発生した 1834 年の人種暴動、反アボリショニスト暴動の記述は、暴動が起きた事実のみが書かれているだけだった。ちなみに、この暴動中、暴徒の一部はバワリー劇場に押し掛けたが、彼らの間で人気の高かったミンストレル役者 Dixon が一曲披露するとおとなしく立ち去った。この暴徒たちもまた、ニューヨークに住む労働者たちなのである[(8)]。

一方、「白人性」や「白人意識」に注目したホワイトネスの研究者たちは、白人労働者たち、とりわけ 1840 年代に増加したアイルランド移民などの白人の移民労働者たちが、黒人文化を真似て、それを差別的に利用することによって、彼ら自身の白人性を確固なものとしたという。そして、このような「白人性」の意識は、19 世紀の労働者層の中心を成した白人移民たちがアメリカ社会に統合される際、その国民意識形成に決定的な役割を果たしたとされる。白人労働者たちの階級意識の中核にあった共和主義理念は、いまや「白人共和主義」となったのである[(9)]。

しかし、このようなホワイトネス研究におけるブラックフェイス・ミンストレルの理解では、Lott が彼の著作につけた題目「愛と盗み」のうち、「愛」の否定が移民労働者を白人としてアメリカ社会への統合を果たしたのであるから、研究の対象とされるのはもっぱら「盗み」とそれが表現する人種差別となってしまう。Lott のブラックフェイス・ミンストレル研究の秀逸なところは、「愛」と「盗み」、そして白人労働者の黒人および「黒い」文化に対する複雑な感情を描いているところであり、文化の接触がもたらす複雑な作用への深い理解があった点にある。ホワイトネス研究が行った「人種」を所与のものとしてではなく文化的構築物として規定したことは、確かにアメリカ社会における「人種」の意味への深い洞察をもたらした。しかし文化の交流・混淆については、極端な言い方をすれば、おびただしい「人種差別」の指摘以上のものを提示しているとはいえない。それに加え、ホワイトネス研究の提示した「人種意識」や「白人化」は、ナショナル・アイデンティティや「国民化」と結び付けて論じられており、それゆえこのような問題設定からブラックフェイス・ミンストレルを語ると、合衆国というナショナルな枠組みを超える視点は後方に追いやられてしまう。

## 3.「黒塗り」の遍在性、大西洋史的アプローチ

Roediger に代表されるホワイトネス研究ではしばしば、とりわけアイルランド系労働者たちの「白人化」の論証においてブラックフェイス・ミンストレルを利用し、この演芸の提供者（現団関係者、演技者、音楽家）および観客の双方にミンストレルに多くのアイルランド系移民たちの影響力が強かったことが強調される。ブラックフェイスによる演技は、「黒塗り」という仮面をつけることによって、自らの白人性を確認する役割を果たしたのだという。彼らの研究の中で黒い仮面による黒人蔑視がもっぱら移民労働者の白人化と結び付けられたことは、「黒塗り」による演技のある種の遍在性から目をそらすことにもなった[(10)]。

Dale Cockrell は *Demons of Disorder: Early Blackface Minstrels and their World* (New York, 1997) において、アメリカでブラックフェイス・ミンストレルが劇場の舞台に上がる以前にも「黒塗り」の演技が舞台で演じられていたことを指摘する。1830 年代以降アメリカの劇場は大衆化が顕著になるが、それ以前の、未だ中産階級以上の人々中心の劇場でも「黒塗り」が登場する演目が散見される。ヨーロッパで演じられる場合、煤を顔に塗る程度の役も、アメリカではミンストレル・ショーに見られるような真っ黒な化粧を施して演じられることが多かったのである。ブラックフェイス・ミンストレルも Emmett 以前はすべての登場人物が「黒塗り」ではなかったことを考えると、連続性を見ることもできる。また Cockrell は、舞台における黒人蔑視はブラックフェイス・ミンストレルに限らないと指摘する。さらに、ミンストレルの中心地ニューヨークには黒人人口も多く、ストリート文化においては黒人文化との混淆が見られたと述べている。最初期のブラックフェイス・ミンストレルでは、黒人的な踊りや歌を南部の黒人から学んだとしているが、むしろ都市のストリート文化との関係性を示し、そこに実際の黒人文化の影響を見たのであった[(11)]。

ところで、ミンストレル研究以外に目を移すと、アメリカの 19 世紀史においては、奴隷制の研究が深化する中で、1990 年代に後半には南北戦争以前の時期における北部における奴隷制やその残滓、さらに黒人たちの生活が明らかにされてきた。なかでも、大西洋岸の大都市やその周辺などの、北部において黒人人口が多かった場所に注目が集まるようになった。大西洋

を越えてカリブ海やヨーロッパと結ばれていたこれらの地域には、カリブ海から移住者も多く、さらに水夫として大西洋を移動する者もあった。なかでも大西洋岸中部のニューヨークは、ニューイングランドと比較すると奴隷制が廃止される時期が遅く、19世紀はじめには奴隷を含む黒人人口は思いのほか多かった。都市は農村に比べて黒人が職を得やすい不熟練労働の仕事が多く、特にニューヨークのような港湾都市は港湾労働やポーターなど黒人が働ける仕事を多く提供していた。この地の黒人たちも大西洋を介して広範な地域とつながっていた。彼らはカリブ海から移住した者も多く、さらに水夫として大西洋を移動する者も少なくなく、大西洋からカリブ海、ヨーロッパ、アフリカにいたる広範な地域の影響を受けていたのである[(12)]。

そしてこれらの地域は、早い時期にブラックフェイス・ミンストレルの流行した地域とも一致している。Cockrellは、ニューヨーク市のような黒人人口の多い北部都市では黒人文化との文化的混淆状況が日常的に見られ、ブラックフェイス・ミンストレル形成にそれが大きく寄与したと述べている。Cockrellはさらにブラックフェイス・ミンストレルにみられる「黒塗り」は、社会的にマージナルな存在としての記号を与えるものであるとらえる。「黒塗り」は仮面をつけるのと同じように、他者として既存の社会秩序から自由になれ、社会的上位者に対して日頃の鬱憤を吐き出すことができる。ミンストレルでの黒塗りの演技は黒人を笑いものにしているが、既存の社会秩序を動揺させる要素も含まれていた。顔を黒く塗るという行為は、色の濃さ違いはあるものの、南仏のカーニバルでも見られ、「黒塗り」が他者性を付与するという点はアメリカのミンストレルにも当てはまるという。Cockrellには大西洋の両岸を見渡す視野があり、ナショナルな枠組みを超える方向性を示していたといえる[(13)]。

さらにW. T. Lhamon Jr.は*Raising Cain: Blackface Performance from Jim Crow to Hip Hop* (Cambridge, Mass., 1998)において、ニューヨーク市のロアーイースト周辺は黒人人口が多く、黒人文化との混淆が日常的に起きる機会があったと主張する。魚市場周辺ではしばしば黒人によるストリート・パフォーマンスが行われ、この地のフォークロアの「ウナギ踊り」には、黒人のパフォーマンスが取り入れたブラックフェイス・ミンストレルの原型を見ることができるという。T. D. Riceは黒人と白人とが混ざったこの地区で生まれ育ったのであり、ストリートや広場で演じられる黒人たちのパフォーマンス、さらにそれを真似た白人のパフォーマンスを見ていた可能性が高い。Lhamonはこのように、現実に生じていた黒人と白人の文化混淆の意義を強調しているのであった[(14)]。

ところで近年、植民地時代から19世紀前半にかけての時代の研究では、大西洋の両岸（南北アメリカ・ヨーロッパ・アフリカ）の関係性を強く意識した研究が盛んになっている。これらの「大西洋史」の研究では、海沿いや川沿いの地域は大西洋を介して、ヨーロッパやアフリカ、カリブ海地域との結合や関係への探究が進められており、こうした枠組みは洋上の貿易船（奴隷船や海賊船も含む）もその視野に収めることを可能にした。このような大西洋史の視座を意識すれば、ホワイトネス研究も含め、多くのブラックフェイス・ミンストレルの研究が、時に無自覚であったにせよ、「ナショナル」な枠組みを前提にしていたことに気づかされる。これらの研究では、ブラックフェイス・ミンストレルを通して、アメリカ文化における「黒人文化」的とされる要素の本性や意味を問い直し、アメリカの社会と文化の性質を問題にしてきたのである。ブラックフェイス・ミンストレルの最初期の研究者であったNathanにはイギリスのミンストレルとの比較の視点があったものの、その後の1980年代や90年代の歴史学研究における国民意識や国民形成への関心の高まりに引き寄せられるかのように、ブラックフェイ

ス・ミンストレルの研究も結局はナショナルな視点から語られることがほとんどだったのである[15]。

Cockrell や Lhamon にはアメリカ以外との比較や関係についてもある程度言及されてはいるが、近年、1990 年代に盛んだったナショナルな視点から決別する研究が登場した。2010 年以降に出版された研究の中でも Christopher J. Smith の *The Creolization of American Culture: William Sidney Mount and the Roots of Blackface Minstrelsy* (Urbana, 2013) は、ブラックフェイス・ミンストレル研究に大西洋史的視覚という新たな方向性を、最も明確に示している。Smith はニューヨークのロアーイーストや対岸のロングアイランドで活躍した日常画家 William Sidney Mount がフィドルを奏でる素人音楽家で、かつ多くの音楽やダンスの風景を描いていることを利用し、ブラックフェイス・ミンストレルへの接近を試みている。彼の研究は絵画からの分析であり、これまでの文学や音楽、ダンスに加え、新たな分野からの研究がブラックフェイス・ミンストレル研究に加わったことになる。もちろん Smith は Mount やその周辺が残した日誌などの文字史料も駆使しており、その分析内容は絵画研究にとどまらない[16]。

Smith によれば、ブラックフェイス・ミンストレルを正しく理解するには、大西洋に広がる「クレオール複合」の存在を認める必要があるという。Cockrell や Lhamon も、黒人人口の多いニューヨークなどの大西洋岸の都市に見られる黒人文化と白人文化が交錯する場所とブラックフェイス・ミンストレルとの関係性に言及していたが、Smith はさらにこれを発展させ、以下のようにいう。これまでのブラックフェイス・ミンストレルの研究では、その誕生に不可欠であるはずの白人に黒人文化を伝えた介在者を特定することはできなかった。これは Rice や Dixon、あるいは Emmett などの特定のパフォーマーにその起源を見出そうとしたためであり、ブラックフェイス・ミンストレルの起源はより以前に求められるべきである。「クレオール複合」はカリブ海や南米はもちろん、アフリカやヨーロッパにおいても見いだせる。アメリカ国内では港湾都市や川沿いの町、さらにはフロンティアに広がっており、これらは早い時期にブラックフェイス・ミンストレルが流行した地域と一致する。「クレオール複合」の遍在性こそブラックフェイス・ミンストレルの母胎であり、Mount が描くロングアイランドの農村もアングロ・ケルト文化（Smith は広義のイギリスおよびアイルランド文化を合わせてこう呼ぶ）とアフリカ文化の交流が濃密に行われた場所であった[17]。

彼はこの研究において、ニューヨークのような都市だけでなくロングアイランドのような後背地の農村の重要性を指摘する。19 世紀前半のロングアイランドは、人口が増大するニューヨークへの食糧供給のためのプランテーションが拡大し黒人人口も増加し続け、さらにウォーターフロントにはロアーイーストと同様に、港湾労働などで多くの黒人が働いており、しかも黒人たちにはカリブ海の出身者も含まれていた。Mount の絵にはボーン（骨を打ち鳴らす打楽器）やフィドル、バンジョーなど、ミンストレルで使われる楽器を演奏する様子も描かれているが、これらの演奏家たちは黒人であることも白人であり、しばしば同様の構図でどちらも描かれた。さらに Smith は、ロングアイランドなどの都会の演劇空間にも接近しやすくいこの場所はミンストレルなどの黒人演奏家たちを輩出する場となったとしている[18]。

「クレオール複合」の遍在はまた、アメリカのブラックフェイス・ミンストレルがヨーロッパ講演で人気を得たことも説明しうる。イギリス人やフランス人のある人々は、大西洋に広がる「クレオール複合」にまったく馴染みがないわけではなかったのである。おそらくは「新奇さ」のなかに馴染みある要素が適度にまざっていたからこそ、魅力的であったのではないか。

このように考えると、ブラックフェイス・ミンストレルは移民白人の国民化というような、ナショナルな枠のみならず、より広い大西洋史の文脈からも考察すべきであることが明らかとなるのである。

## おわりに

ブラックフェイス・ミンストレルはその表現や内容が人種差別的であり、アフリカ系アメリカ人にとって看過できないものである。むろんその点は否定しないが、過去の光の中で見れば、ミンストレルが「白人の、白人による、白人のための文化」であるとは断定し難い。いかに人種差別的であっても、アングロ・ケルト文化とアフリカ文化の現実の交流と混淆を認めた方が 19 世紀のミンストレルを理解しやすい。

ここでもう一度、「文化盗用」について話を戻したい。ある文化が他文化と接触した場合、その文化が何らかの点で魅力的であれば「真似る」という行為は、ごく当然として起こる普遍的なものである。では、過去において（あるいは現代においても）ある文化と他の文化が接触する場合、先入観も差別感もなく作用し合うことは、実際にはどれぐらい可能だっただろうか。文化交流・混淆は、多様で複雑な現代の文化状況を生み出したといえるが、そこに文化における支配関係が見られないことは皆無といってよい。文化接触の初期にはその主な関心が「新奇さ」に注がれたにしても、やがては文化を支配の道具として利用していく例は、歴史上枚挙がない。もし「文化盗用」という非難が真似の仕方を問題にするのであるならば、アメリカにおける人種差別や先住民迫害の歴史、そしてブラックフェイス・ミンストレルに見られるひどい人種差別の表現から十分に理解できる。しかし文化において「真似る」こと自体がなくなることはないだろうし、それを完全に阻止することは不可能であろう。「文化」という資源は、必ずしも個々の社会集団に固着したものではなく、時にそこから浮遊し、姿を変えつつ受容されていくものかもしれない。

## 註

（1）日本での主な研究としては、楠原(斎藤) 偕子「19 世紀アメリカのポピュラー・シアター：生成期のミンストレル・ショウ―演劇的仕掛けとアイデンティティ形成―」『美学美術史論集』（成城大学）17 (2008 年 3 月)、p.93-117、小木麻里子「ミンストレル・ショーにおけるミミクリー―19 世紀アメリカの黒いアイルランド人―」27（2007 年 12 月）、p.75-88、宮下和子「スティ-ヴン・フォスタ-とミンストレルショーに見るアメリカの夢」『南九州大学園芸学部研究報告（自然科学・人文社会科学)』19（1989 年 3 月）、p.135-144、神戸周「東京学芸大学紀要（第 5 部門 芸術・体育）」39（1987 年 10 月） p173-182、宇沢美子「仮面、言語、異人：ブラックフェイス・ミンストレルシーの陽気な文法」『マーク・トウェイン研究と批評』14（2015 年 4 月）、大和田俊之「黒と白の弁証法―擬装するミンストレル・ショー」『アメリカ音楽史―ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで―』（講談社、2011 年）、第 1 章、p.6-24、伊藤慶次「19 世紀前半ニューヨークの劇場とブラックフェイス」『関西大学西洋史論叢』17（2014）、p.1-19、拙稿「ブラックフェイス・ミンストレルと労働者階級―19 世紀前半ニューヨークと人種と階級」『立命館文學』604（2008 年 2 月）、p.684-694 などがある。2020 年には全 4 巻（別冊日本語解説付き）19 世紀ミンストレル・ショーと音楽の資料集成 Keiko Wells ed., *Minstrel Shows and Songs, An Archival Collection of Early American Books and Documents* (Tokyo, 2020), vol.1-4 が日本において刊行されたことは、日本で網羅的にブラックフェイス・ミンストレルの史料に接近しやすくなった。編者のウェルズ恵子氏の手による史料解説は、それぞれの巻の収録史料のわかりやすい案内書であるとともに、ミンストレルが「アメリカの独自性」であるとする立場（ミンストレル・ショー自体が喧伝し研究者の多くもそ

れを前提とした）を相対化する視点も示されており興味深い。

（2）Hans Nathan, *Dan Emmett and Early Negro Minstrelsy* (Norman, Okla., 1962).

（3）Robert Toll, *Blacking Up: The Minstrel Show in the Nineteenth-Century America* (New York, 1974). ほぼ同時期の発表された研究として、Alexander Saxton, "Blackface Minstrelsy and Jacksonian Idea," *American Quarterly*, 27-1 (1975), 1-28.

（4）Eric Lott, *Love and theft: Blackface Minstrelsy and the American Working Class* (New York, 1993) はブラックフェイス・ミンストレルへの学術的な関心を集めた。筆者も書評「『愛と盗み』―ブラックフェイス・ミンストレル劇にみる労働者階級の文化―」『アメリカ史評論』12（1994 年）で Lott によって示された労働者階級の黒人への意識の二重性を紹介した。

（5）Lott, 38-62, 82-87. *Love and theft* では多くの「新労働史」の研究に言及されている。

（6）James Annemarie Bean and Brooks McNamara eds., *Inside the Mask: Readings in the Nineteenth Blackface Minstrelsy* (Middletown, 1996). その後もブラックフェイス・ミンストレルの研究の論文集が出版されている。Stephen Johnson ed., *Burn Cork: Tradition and Legacies of Blackface Minstrelsy* (Amherst, 2012).

（7）David R. Roediger, *The Wage of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class* (New York, 1991)〔邦訳、小原豊志、竹中興慈、井川眞砂、落合恵子訳『アメリカにおける白人意識の構築――労働者階級の形成と人種』（明石書店、2006 年）〕　その他、Alexander Saxton, *Rise and Fall of the White Republic: Class politics and mass culture in nineteenth-century America* (1990) が白人労働者の階級意識と人種主義の関係を分析する中で、ブラックフェイス・ミンストレルもその重要な根拠としている。

（8）Sean Wilentz, *Chants Democratic: New York City & the Rise of the American Working Class, 1788-1850* (New York, 1984)〔邦訳　安武秀岳監訳，鵜月裕典、森脇由美子訳『民衆支配の賛歌――ニューヨーク市とアメリカ労働者階級の形成 1788-1850』（上・下巻）（木鐸社）〕。Wilenz の描く労働者の階級意識形成のニューヨークの歴史に対しては、人種に関する欠如を批判する研究がある。Anthony Gronowicz, *Race & Class Politics in New York City before the Civil War* (Boston, 1998).

（9）Roediger, ch.3. Roediger はこの章で、Wilentz が *Chants Democratic* のなかでミンストレルに労働者が上位の社会層に反抗する階級的意識を見出している点が近年の研究に反しているとして批判している。ただし、Roediger は Wilentz の反証として挙げた近年の研究に Lott のこの重要な研究を含めていない。

（10）Roediger, 115-127. 黒人が白人を演じることの意味については、山田史郎「ホワイトエスニックへの道―ヨーロッパ移民のアメリカ化」、山田史郎・北村暁夫・大津留厚・藤川隆男・柴田英樹・国本伊代著『近代ヨーロッパの探究 ① 移民』（ミネルヴァ書房、1998 年）第 5 章、p.241-285 で Roedeiger の論に沿った捉え方を示している。

（11）Dale Cockrell, *Demons of Disorder: Early Blackface Minstrels and their World* (New York, 1997). Cockrell は第 1 章でアメリカの初期の舞台におけるブラックフェイス、第 2 章ではストリート文化におけるブラックフェイスを分析している。

（12）Shane White, *Somewhat More Independent: The End of Slavery in New York City, 1770-1810* (Athens, 1991) 153-155, 186. White はさらに、ニューヨーク州の奴隷解放後に舞台で自由を表現した最初期の劇団を取り上げている。Shane White, *Stories of Freedom in Black New York* (Cambridge, Mass., 2002). ファイブ・ポインツから海岸よりの黒人が多い地域の街角では、白人が黒人の「放蕩」と感じるような姿や行為を行っていたという（51-54）。

（13）Cockrell, 50-54.

（14）W. T. Lhamon Jr., *Raising Cain: Blackface Performance from Jim Crow to Hip Hop* (Cambridge, Mass., 1998), 1-55.

（15）大西洋史に視点からの研究で、邦語で読むことができるものとしては、バーナード・ベイリン著、和田光弘・森丈夫訳『アトランティック・ヒストリー』（名古屋大学出版会、2007）、マーカス・レディカー著、『海賊たちの黄金時代―アトランティック・ヒストリーの世界』（ミネルヴァ書房、2014 年）マーカス・レディカー著、上野直子訳『奴隷船の歴史』（みすず書房、2016 年）などがある。

（16）Christopher J. Smith, *The Creolization of American Culture: William Sidney Mount and the Roots of Blackface Minstrelsy* (Urbana, 2013), 64.

（17）Smith, 1-7.

（18）Smith, 13-14.